

## 創立者との出会い、草創の創大祭を語る

奥 山 義 朗・長谷川 祐 正

**司会** ただいまより、創価教育研究センター主催のシンポジウムを開催致します。本日のシンポジウムは、「新・人間革命『創価大学』の章を聞く（2）」でございます。「創立者との出会い、草創の創大祭を語る」と題して行っていきます。では、神立センター長より本日の講師紹介をかねてご挨拶申し上げます。

**神立** 皆様、こんにちは。いよいよ創価大学は創大祭の雰囲気包まれております。そこで今回は、皆様のお手元に配布した資料「創価大学」の章（33～35）についてであります。1期生の先輩が、どういう思いで創大祭を開催したのかということ、そしてそれについて創立者が書いて下さったわけでありまして。「創価大学 34」の中に「実行委員会がつくられ、文学部の奥田義雄が実行委員長に選ばれた」とありますが、今日はそのモデルである奥山さんにお出でいただいております（拍手）。奥山さんは当時、すでに神奈川大学に入学しておりました。神奈川大学の3年生のときに創価大学の開学を聞きまして、そこで創価大学を受験し入学されたというわけです。だから、当時の学生にとっては頼れる兄貴的な存在でした。その奥山さんが実行委員長を務められたのです。それからもうお一方は、第4回創大祭実行委員長を務められた、2期生の長谷川さんであります（拍手）。長谷川さんは現在、創価女子短期大学の事務長を務められております。

先輩方がどういう思いで創大祭を迎えたのか、そして創大祭に来られた創立者とのような出会いがあったのかを中心にお話をさせていただこうと思っております。私自身は創価大学4期生であります、やはり草創の方のお話はなかなか聞けないものです。ちょうど私が大学1年生のときの創大祭の話であります、非常に楽しみにしております。

それでは、お二人の先輩方、何卒よろしくお願い致します（拍手）。

**司会** それでは、第1回創大祭実行委員長の奥山義朗さんよろしくお願い致します。

**奥山** 只今ご紹介にあずかりました、1期生の奥山でございます。本日は我が母校である創価大学で、このような機会を与えていただき誠に光栄であります。拙いお話になるかと思いますが何卒よろしくお願い致します。

はじめに、私の創価大学入学の動機についてお話させていただきます。私が創価大学の名前を初めて聞いたのは、1964年6月に行われた第7回創価学会学生部総会の折でした。当時中学3年で、その場に参加した私は、漠然と「すごいな！」としか思いませんでした。1968年、私は神奈川大学に進学したのですが、当時は大学紛争の最中で、「何のために大学に入学したのだろう」と自問自答の毎日でした。そのようななか、1969年に創立者が鎌倉指導に来られた折、そこに居合わせた高等部、学生部員と勤行をして下さり、「鎌

倉グループ」という人材グループを結成して下さったのです。そして毎年夏に、創業者が神奈川の三崎研修道場に来られた際は、そこに集うようにという提案をいただいたのです。その年の夏、そして翌年の夏も、創業者は約束通り、鎌倉グループを呼んで下さり、忘れ得ぬ思い出の歴史を刻んで下さいました。翌年1970年の夏、この年は創価大学開学の前年ですが、創業者はグループのメンバーで浪人中のKさんを、「来年、私の作る創価大学が開学するから、必ず来るんだよ。待っているよ」と激励されました。横で聞いていた私は、自分に語りかけられたように大きな衝撃を受けました。しかし、私は神奈川大学の3年になっており、入学金や学費のこともあったので、自らが創大受験の腹を決めたのはその年の12月でした。

翌年の1月だったと記憶していますが、「どんな所か見ておこう」と入学願書を提出に大学まで来ました。当時、私は神奈川の横須賀に住んでいたのですが、チョコレート色の、床が木でつくられた横浜線で八王子まで来て、タクシーに乗り創大へ向かいました。16号線から中にはいると何もない林の中で、心配になり「運転手さん、本当にこっちですか？」と尋ねると「確かこっちの方だと思うんだけど……」との心許ない返事。しかし、何もない山の中から突然大学が見えた時は、本当に感激したことをよく覚えております。

幸運にも、およそ700人の1期生の一員として入学することができ、4月10日の入学式を迎えたわけです。言うまでもなく、1期生のほとんど全員は、創業者である池田先生を求めて集い来た人たちです。それだけに入学式に創業者が出席されなかったことは、何ともいえないむなしさを感じました。しかし、開学から30数年後に『新・人間革命』『創価大学』の章を拝読し、当時、創業者がどういう心境でおられたかを知り、いいようない感激を覚えました。このように綴られています。「皆、伸一を慕っていた。創業者を求めている。伸一は、こうした学生たちの気持ちを思うと、入学式に出席しなかったことが申し訳なく、胸は激しく痛んだ。そして、彼は、創業者として、一生涯、創大生を厳然と見守り、励まし続けていくことを、一段と強く決意していたのである」と。1期生が創業者を求める何倍、いや何百倍、何千倍も創業者は学生のことを思い、成長を願っていて下さったのです。

1期生にとって、創業者が入学式に出席されなかったことは、大きな発奮材料となりました。当時、一部教員の中に、創業者が大学行事に出席されることを快く思わない人たちがいたことは『新・人間革命』に記されている通りです。私たちは、「それなら学生の手で創業者を大学にお呼びしよう」と決意しました。しかし、具体的にどのような機会にという所まではなかなか決まりませんでした。

そんなとき、創価学会学生部の夏季講習会が総本山で行われ、創大生も多数参加致しました。当時、学生部の講習会は2期に渡って行われ、創大生は皆1期の参加だったのですが、何人かが受験生コーナーで創大啓蒙のために残りました。2期の講習会の折、創業者が各大学の代表と懇談して下さいることになり、そこに創大の代表も加えていただいたのです。この席に参加した創大生の一人は、大学職員をされている中村紀彦さんですが、参加する前に「とにかく創業者に大学に来ていただくよう、何が何でもお願いしよう」ということで、中村さんを皆で送り出しました。責任は重大。河原でスイカを食べながらの懇談が始まり、創業者から「何でも聞いてあげるよ!」との声に、中村さんも必死に手を挙げました。「ここで何も言えなかったら皆に合わせる顔がない。一生の悔いを残してしまう」と、中村さんも必死だったと思います。その後のやりとりは『新・人間革命』に詳しく記

されていますのでご紹介致します。

「先生、実は、お願いがあります。創価大学に来て下さい！」

創大生であった。その言葉には、ひたむきさがあふれていた。

「何かあるのかい」

創大生は返事に詰まった。皆で、「山本先生を大学にお呼びしよう」と誓い合ってはきたが、何に招待するかも、決まっていなかったのだ。

とっさに彼は、学友との語らいのなかで、「大学祭をやりたい」という話が出ていたことを思い出して言った。

「大学祭をやります」

「いつ、やるんだい」

「……秋です」

日時も未定の、漠然とした答えであった。

「みんな、頑張っているのかい」

「はい、元気です。先生のご訪問をお待ちしています」

「わかった。学生の皆さんの招待ならば、私は、必ず行きます！」

欣喜雀躍した中村さんと私は一目散に大学に戻ったのですが、学生は皆帰省してしまって大学にいないのです。ともかく、当時の篠原学生部長や岡安事務局長に講習会での話を伝え、どうしたらいいか相談しました。「皆に伝えることだ」ということで、全国に散っていた学生にあらゆる手段ですぐに大学にもどるよう連絡致しました。わけもわからず戻ってきた人もいましたが、創立者が大学祭に来て下さるということはすごい勢いで1期生に伝わったように記憶しています。

9月から本格的な準備が始まり、当時は自治会も結成されていませんでしたので、創大生部会の中心者であった私が実行委員長を務めさせていただくことになりました。副委員長には中村さんと経済学部井上聖志さん、書記に現在東京創価高校の教頭をしている狩野俊一さん、大迫美智代さんに就いていただきました。彼女は『新・人間革命』の中で、「まだ、どこもなくあどけなさの残る、丸顔の女子学生」の大崎美代子として紹介されています。

しかし熱気は溢れていて議論は盛り上がるのですが、具体的にどうするのかというとなかなか話がまとまらない。なにしろ、当時のクラブは数えるほどしかありませんでした。あまりに寂しいので、急遽「囲碁研究会」などが結成されました。クラス企画とか学部企画もやることにしました。

テーマについてはかなりの時間をかけて討議し、創立者の長編詩「革命の河の中で」から発想を得まして、「ロマンと英知と表現と」に決定致しました。創大祭のパフレットに、テーマについて実行委員長のアピールが載っていきまして、今読むといかにも学生らしい勢い込んだ文章で多少気恥ずかしくなるのですが、当時どんなことを考えていたか懐かしくもあります。こんなことが書かれています。「創価大学に学ぶ、我々は主張したい。現代のカオスを打ち破り、人類の未来に光明を与える生きた理念を、我々は社会に提示しようではないかと。第一回創大祭は、それを社会に普遍化しゆく創造的場である。『ロマンと英知と表現と』という統一テーマは我々創大生の文化運動をあらわすものである」と。

実行委員会が発足し、日程が明確になった10月の初旬ごろだったと思いますが、創立者に招待状をお届け致しました。その時には「創価大学・大学祭」となっていたのですが、創立者が「創大祭」という名称を決めて下さったのです。

予算集めも大変でした。何しろ先輩がいませんから、カンパをもらうこともできない。創大祭のパンフレットを販売し、買っていただくことが重要な資金源でした。このパンフを作成し、そこに掲載する広告を取ってくるのは実行委員会の「広報」部門の仕事でした。広報担当だった書記の大迫さんは、市内の老舗和菓子屋に広告をもらいにいった。ところが、『創価大学』なんか知らない！」とけんもほろろに断られた。彼女は「いつか必ず見返してみせる！」と決意をしたそうです。実は彼女が、先日の衆議院選の東京比例区で再選を果たした高木美智代さんです。パンフレットもみんなで販売致しました。私も2日間、販売し続けたことを覚えております。

中央体育館で記念フェスティバルを行うことになったのですが、とにかく予算がありませんから立派なステージは作れません。現在日本紙パルプに勤務している竹村さんが知恵を出しまして、パイプ椅子を収納するケースを土台にして、上にコンパネを敷きステージを作りました。また、当時は体育館に光を遮る遮光のカーテンもありませんでした。そこで書記の狩野さんが中心になって、黒いケント紙を上からつるして光を遮りました。けれども予算の関係と時間がないので、全部を設営することはできず本当に必要な部分だけでした。

ともかく、前日の夜中までというか朝までトンカチやノコギリの音がキャンパスに響き、教室で仮眠した学生も随分いたと思います。皆、自分のサークルやクラスの企画、実行委員会の仕事、記念フェスティバルの準備と、一人が何役も掛け持ちしていました。そんな苦闘を支えていたのは何かといえば、言うまでもありませんが、1期生の文集『草創』にこのように記されています。「しかし誰一人として弱音を吐くことはなかった。一期生の手で創大祭の歴史の一步を築くのだ、という情熱と闘志に燃えていたからであり、それにもまして、初めて創立者を迎えることができるという、なにものにも換え難い喜びに溢れていたからである」と。

こうして当日の朝を迎えました。午前中、私は展示されている教室を回ったのですが、きちんと準備が終わっている所は一つもないのですね。机の上で寝ている人はいる、あるいは模造紙に一生懸命書いている人はいる。「これで創立者を迎えて大丈夫なのか？」と一瞬、不安になりましたが、皆、目がらんと輝いているんですね。私も腹が決まりました。「創立者に1期生の心意気を見ていただこう！創立者を求めてやまない一人一人のこの姿を見ていただくんだ！」と。

1971年11月21日の午後1時過ぎ、正面玄関のブロンズ像前に創立者池田先生は到着されました。学生を代表し、実行委員長である私と、現在大学の理事長である田代さんがお迎え致しました。

創立者は車から降りるや否や、「ご苦労様！ 約束通り来たよ！」と声をかけて下さいました。あの瞬間の感激、感動は34年たった今日も、忘れられません。「遂に我々の願いが叶った。夢が現実のものとなった」と。

創立者の姿には、一人でも多くの学生を励まさずにはいられないとの気迫が漲っていました。足早に周辺の模擬店の学生を励まされると、1階ロビーに入られ、1階から3階までのすべての企画・展示に足を運ばれ、一人一人の学生に声をかけられ、どんな稚拙な展

示も真剣に見て下さいました。

文集を買って下さったり、模擬店にも立ち寄られ、「売れている？」とたくさん購入して下さい、なかにはその場で召し上がって頂いたものもありました。学生の私から見ても、「これは火が通っていないのではないか」というような代物もありましたが、創立者は「おいしい！」とほめて下さり、この時ばかりは冷や汗が出る思いがしました。

創立者はトイレに立ち寄られた際にも、私が待機していると「一緒に入ろう」とトイレのなかでも声をかけて下さいました。

文学の池のほとりに仮設された「歩こう会」の山小屋にも足を運ばれ、小さな小屋の中でメンバーと懇談されたのも忘れ得ぬ一コマです。

『新・人間革命』には、公害を扱った教室を訪れた折の様子が綴られていますが、これは「法と社会研究会」というサークルで、「創立者を創大祭にお迎えするんだから、何としても自分たちで先生に喜んでいただけるような研究をしよう」と決意して臨んでおりました。当時彼らは高度成長のなか、社会で大きな問題となっていた公害にスポットをあて、新潟水俣病を取り上げました。ご存知のように新潟水俣病というのは、新潟県阿賀野川の工場排水による水銀中毒です。「法と社会研究会」のメンバーは現地調査をしようと、1台のおんぼろ車で2泊3日の取材旅行を敢行しました。1日目は車のなか、2日目はオールナイトの映画館で仮眠。彼らはまず新潟大学医学部を訪ねました。なぜなら、新潟大学の教授が新潟水俣病の原因を「昭和電工の廃液が原因である」とほぼ立証していたからです。しかし、簡単に調査が進んだわけではありません。教授から「どこの大学の学生ですか？」と聞かれ、「創価大学です。文化祭で取り上げるために来ました」と答えると、「創価学会の大学ですね」と顔色が変わったそうです。そこで彼らは創大設立の趣旨、建学の理念、創立者のことを懸命に語った。彼らのひたむきな姿勢に、教授はいつしか顔色を和らげ「君たちはえらいね」と、多くの情報を与えるとともに、「私の名前を使ってもいいよ」と患者や患者を抱えて苦しむ家庭を紹介してくれたのです。

こうした地道な現地調査・取材をして発表された展示を創立者は約10分に渡り、一つ一つ細かく見て下さいました。そして「悲惨だね。人間が人間をおびやかす一番悲惨なものが、公害だよ」と語られ、「徹夜で準備したのかい？」とメンバーに声をかけられました。「徹夜で現地まで行ってきました」と答えると、「自分たちでやったんだね」と全員にお小遣いを下さいました。そして、「この苦労が必ず社会で花開く時が来るよ」と激励して下さいました。

「法と社会研究会」での一コマを紹介しましたが、このような師弟の出会いの光景が各教室で展開されたのです。

創立者がすべての展示を回り終えたとき、約3時間が経過していました。創立者はこの間、ずっと立ちっぱなしであり、歩き通しでした。日々の激闘の中、どれほどお疲れになられたでしょう。

『新・人間革命』にはこうあります。

すべての展示を見て回った山本伸一の体は、疲労の極にあつた。足は棒のようになっていた。

彼は、総本山での行事に出席し、寸暇を惜しんで原稿の執筆にあたっていたが、この日、時間をこじ開けるようにして「創大祭」にやって来たのだ。

首も、肩も、凝り固まり、腕を上げようとすると、ボキッと音がした。

創立者は、創大にこられる直前の11月18日から20日まで総本山での行事に出席されていました。この時期は、正本堂落慶の前年であり、建設中の視察や打ち合わせに、休む間もない連続であったと推察致します。21日も総本山から大学に直行されたのです。にもかかわらず、夕刻からの体育館での記念フェスティバルにも出席して下さり、冒頭次のように激励して下さいました。「第1回の創大祭本当におめでとうございます。皆さん方が金曜日までまだ授業があって、この第1回の大学祭を何とか成功させようと思って、寝食を忘れ、夜も寝ないで頑張ったことは、よくわかっております」。そして最後に、次のように締めくくられました。「この意味において、これからも、私は陰で皆さん方が、成長することを何よりも楽しみに、何よりも期待をかけ、そして私は陰の陰の陰で、全人類の中で只一人、一番諸君の味方として応援していることを知って頂きたいと思います」。

皆泣きました。あの寂しかった入学式、喧々譁々の議論を重ねた日々、手探りで必死の準備をしてきたこと、徹夜の作業、応援してくれた教員・職員の方々、材木を提供して下さいました地元の皆さん。いろいろなことが脳裏を巡り、泣かずにはいられませんでした。すべての労苦は黄金の財産となったと思います。

今振り返ってみると、入学式に創立者が出席されず、学生たちが自らの手で創立者を大学にお呼びしようと団結し、祈り、求め戦い抜いたことが、あの感動の第1回創大祭として結実したのだと思います。

実はこの日、大学にいながら、創立者にお会いできなかった学生もいました。林のなかで、朝から行事が一切終了するまで、約8時間にわたり警備を担当してくれた人たちです。現在教務部長の山崎純一さんもその一人です。先日、山崎さんに「どうして警備をやることになったのか？」と聞いたら、「あなたがやるよういったんですよ！」といわれました(笑)。「何か覚えていることはありますか？」と聞きましたら、「鉄砲を持った猟師がきて撃たれると思った」と語っていました(笑)。まむしにかまれそうになった人もいたようです。ともあれ、大成功の舞台裏で支えてくれた人たちがいたことを忘れてはならないと感謝しています。

「創価大学」の章には、開学3年目に、創立者が始めて授業参観された折の様子が綴られています、このような一節があります。「教育とは、自分の心に師をもつことである」と。実に深い言葉であると思います。ギリシャの哲学者、プラトンの「第7書簡」に、教育とは何かということについて、つぎのような一節があります。

「(教える者と学ぶ者が)生活を共同にしなが、その問題のことがらを、直接に取り上げて、数多く話し合いを重ねてゆくうちに、そこから、いわば飛び火によって点ぜられる燈火のように、突発的に、学ぶ者の魂のうちに生じ、生じたものそれ自体が、みずからを養い育ててゆくという、そういう性質のものなのですから。」(『プラトンⅡ』、中央公論社、1978年)

ここで語られている教育とは、単に知識を教える教育と対極にあるものでしょう。学ぶ者の全人格を揺り動かす、生きることに関わる全人格的な影響であり、まさに人間教育の名にふさわしいものであると思います。

創立者は常々、「私のどこを切っても戸田先生がいる」「毎日、戸田先生と対話している

んだよ」「このような時、戸田先生ならどうされるだろう」と語られます。心のなかに師を持つとは、まさにこういうことであると思います。

大学で学ぶのは4年間、その後に長い人生が待っている。どの人にとっても、人生が難問の連続であることは言うまでもありません。第10回創友会総会で、創立者は「人生の十字路に常に立たされているのが人間である」とスピーチをされましたが、人生は常に前に進むのか、右へ行くのか、左に曲がるのか岐路を選択しなくてはならない。その様なとき、自分の心にいる師と対話し、かけがえのない人生を勝ち超えていきたいと思うのです。人間教育の真髄はそこにこそあります。

1期生の心のなかに、あの創大祭の出会いがあります。汲めども尽きぬ4年間の思い出があります。どんな時も、全人類のなかで只一人一番の味方として、どんな苦しいときも応援して下さる創立者がいる。必ず社会で勝利し、創価大学を宣揚するとの思いで今日まで生き抜いてきたと確信致します。

創価同窓の誇りは、「創立者池田先生の真の弟子」であることはいふまでもありません。どうか今日集われた創大生の皆さんも、生涯心のなかに師を持ち続け、勝利の人生を飾りゆくことを願ってやみません。

わが母校、創価大学の更なる大発展を心よりお祈り申し上げまして、私の話を結ばせていただきます。ありがとうございました（大拍手）。

**司会** 誠にありがとうございました。それでは続きまして、第4回創大祭実行委員長、長谷川祐正さん、よろしくお願い致します。

**長谷川** 皆様、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました、2期生の長谷川と申します。現在創価女子短大の事務長をしております。1976（昭和51）年に卒業し、創価大学の職員にさせていただいて、来年の春で30年になります。どうか宜しくお願いします。

本日来ていただきました奥山義朗さんは1期生の先輩のなかでも、私は公私ともに大変お世話になり、様々な場面で貴重なご指導とアドバイスをいただいた方であります。今日私があるのも奥山さんのお陰です。この場をお借りして改めて厚く感謝を申し上げます。

本日この場に呼ばれたのは、私が第4回創大祭の実行委員長を務めさせていただいたためです。思い出話になってしまいますが、第2・3・4回の創大祭を中心に若干お話をさせていただきたいと存じます。

1972（昭和47）年、私は創価大学に2期生として入学しました。滝山中寮7号室に入寮し、大学生活がスタートしました。創価学園での高校時代はそれなりに頑張っていました。私自身、「どうせやるなら楽しくやろう！明るく、楽しく、何事も！」で、マイペースに高校時代を過ごしていました。

創大に入学するとき、高校時代の反省から、次のようなことを考えていました。「自分自身の存在の意味は何なのか。その確かな実感をつかみたい。もっとしっかり真剣に生きよう。目の前の課題にしっかり取り組もう」と。

また、「池田先生の思想を自分のものにしよう」「仏法をしっかり学ぼう」「池田先生に近づきたい、先生のお心が分かるようになりたい」「池田先生の弟子と言える自分になりたい」という思いから、信仰を深めるため、創価学会の活動に頑張りました。

そんな気持ちを持ちつつ、入学後の一大イベントである第1回滝山祭に全力を挙げまし

た。そして、創立者池田先生をお迎えすることができ、ご指導をうかがい、「創価大学に入学して本当に良かった」と思えるようになったのです。

2期生のなかには、創大が第一志望ではなかった学生がいました。しかし、第1回滝山祭が大きな転換期となりました。「創価大学で頑張ろう！」という気持ちが高まってきたように思います。私もそのうちの一人でしたが、実はまだすっきりした気持ちにはなれませんでした。みんなが真剣に語るところの「大学建設」という言葉の意味がよく分からないのです。「自分は池田先生を師匠と口では言うが、本当にそうなのか。自分は池田先生の弟子と言えるのか」と。まだまだ実感がなく、まだまだ弱いのです。

2期生として入学した年、1972（昭和47）年の第2回創大祭は10月26・27日に開催されました。私は経済1年2クラスで参加し、中国風喫茶をやりました。自分で言うのもおかしいのですが、なかなかの出来栄で、池田先生にご来店いただくことが出来ました。クラスの皆と喜びあいました。

経済学部北先生の研究会で、小論文集を作成したことも、良い思い出です。草創のときの落語研究会で高座に登り、「狸賽」という古典落語をやりました。怖いもの知らずで、クラブ員は高座名を「衆生亭所有楽」とか「抜苦亭与楽」と付けて高座に上がりました（笑）。今考えると、まさに冷や汗ものです（爆笑）。自分自身にとっては、なかなか楽しい充実した大学祭でした。

そして1年生の終わりに、私自身の生涯の分岐点となる池田先生との出会いが生まれました。1973（昭和48）年3月26日、ある人材グループの一員として、なんと池田先生に面接をしていただくことになったのです。全く予想外のことで、本当に驚きました。日大講堂の控え室で初めて先生を間近に拝見し、声をかけていただきました。生まれて初めての感動が走りました。「この人が私の生涯の師匠なんだ。生涯裏切るまい！」と心が定まりました。

実はこのときから、私の生命の中で何かが大きく回転を始めました。先生の弟子として、門下生として、創価大学の建設に全力をあげる心が定まりました。

2年生になり、1973（昭和48）年に開催された第3回創大祭は実行委員として取り組みました。企業関係者を招いての祝賀会の受付、案内、誘導の責任者を任されました。ちょうど1期生の就職戦線が来年から始まるというときです。

1・2期生的女子学生が来賓の受付と中央体育館までのご案内をすることになり、その責任者になったのです。この学生による受付、案内誘導は企業の方々から大好評をいただきました。このときの対応が見事で素晴らしく、1期生的女子学生のなかには、その企業の社長秘書になった方もでした。

『新・人間革命』の「創価大学の章」にはその模様が詳しく紹介されています。先生自ら参加の企業のトップ、人事関係者に名刺を配られ、挨拶をされ、汗びっしょりになられながら就職を開拓されたのです。

『新・人間革命』には次のようにあります。「私が山本でございます。大変にお世話になっております。来年は、一期生の就職活動が始まります。初めてのことで、ご指導、ご尽力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます」と。また、「彼は必死であった。『伝統のある他大学に進学していれば、就職も有利であり、多くの学生が、希望通りの企業に就職できるにちがいない。それを、あえて、苦勞を承知で、私の創立した新設校の創価大学に来てくれたのだ。だから、自分が直接、各企業の代表と会い、誠心誠意、創大生のこ



とをお願いしよう。それが創立者である私の義務だ” 伸一は、そう深く心に決めていたのである」と。

先生は私たち創大生のためにそこまでされている。体育館の中で模擬店等の役員をしていた学生は、その先生のお姿を心に焼き付けました。これほどまで学生のために尽くされる創立者はどこにもいない。先生本当にありがとうございますと、皆、大感動し、感涙に震えました。

そして翌日、創立者は文系A棟の教室の「サンマ亭」で、学生自治会や学友会、学寮等の学生代表とサンマ定食の会食懇談会に臨まれました。学生の近況等に耳を傾けられ、種々歓談していただきました。食事が終わり、先生を囲んで懇談に入りました。先生の視線と私の視線が合った何回目かのとき、私は無意識に視線をそらしてしまいました。「しまった!」と思ったそのとき、先生はその瞬間に「余裕がないな」と言われたのです。まさに図星です。すると実行委員長の忍田さんが、「彼は昨日の祝賀会で受付の責任者で頑張りました」と助け船を出してくださいました。先生は「そうか。君は疲れているね。君も。君も」と私の隣にいた3期生の正木さんや本多さんにも言われ、「今日はみんな早くやすみなさい」と、温かく声をかけてくださいました。

「余裕とは何か」、それが私にとってまた大きな課題になりました。

3年生になり、1974(昭和49)年に開催された第4回創大祭は実行委員長をやらせていただきました。1期生が第1・2・3回の創大祭実行委員長を務め、第4回創大祭の実行委員長は2期生が務めることになったのです。

創大祭の前日、先生をA棟前でお迎えしました。「創大祭おめでとう。よく晴れたね」と温かい一言がありました。先生は早速展示の教室へ、そして学長や学部長と歩きながら歓談。その後、天空広場で国家試験合格者等と記念撮影、激励が続きました。

そして午後4時から、A棟第2会議室で創立者池田先生へ、創価大学にとって、第1号となる名誉教授称号が授与されました。このことは『新・人間革命』に次のように書かれています。「伸一は、再三にわたって、受けるように要請された。“これで断れば、皆の気持ちを踏みにじり、大学に対して失礼になる。お受けするしかないのかもしれない……”やむなく、伸一は了解した」と。さらに、「これは、学生の皆さん、教職員の皆さんをはじめ、大学を守るという意味の象徴として、さらに、一段と発展させるという誓いの証として、謹んでお受けいたします」と述べられ、会場は喜びの拍手がこだましました。

夜になり、学生の代表や実行委員会のメンバーを招いていただいて、夕食をともにしていただきました。先生は私に「卒業は大丈夫?」と尋ねられ、「頑張れば大丈夫です!」と私は答えました(笑)。先生は「それでは頑張りなさい!」と激励して下さいました。実は、実行委員長としての6ヶ月間、あまり授業に出席していませんでした。どこかに留年も止む無しの甘えがあったと思います。先生には全部分かっています。私の甘えを断ち切っていただきました。大学祭終了後、しっかり授業に出席し、何とか単位を取得でき、この踏ん張りがあって4年で卒業が出来ました。

創大祭は、翌日に一般公開され、この日も先生の激励が続きました。創大の教職員の子弟の集いである仲良し会・ノーベル会との記念撮影、テニス部・銀嶺合唱団を激励、夕方にはモスクワ大学のストリジャック先生、モスクワ大学からの留学生との懇談、さらに歩こう会の星空の家を訪れ、学生と懇談、激励されました。

翌日も先生の激励は続きました。学生のためになることなら、私はやれる限りのことを

やるという、ものすごい迫力で先生は動かれました。そして、多くの学生が先生との出会いを生命に刻み付けていきました。

ともかく創立者を大学にお迎えし、先生のご指導をうかがいたい、もっともっと、先生にお会いしたいとの純粋な思いが強烈に学生にあったと思います。そのことがなければ、創価大学に入学した意味がない。なんとしても先生のご指導をうかがい、それをバネにして生涯創大生として生き抜くのだという気持ちだったと思います。事実、先生にご来学いただき、ご指導、ご講演を拝聴するなかで、草創に集った学生達は心が定まっていっただけだと思っています。

第1・2回の入学式に先生は出席されていません。その辺の事情は「創価大学」の章に詳細に書かれていますが、それゆえ、先生を創価大学にお呼びすることが必死の戦いであつたし、最優先の課題であつたように思います。お呼びするためには何が必要なのか、何をすべきなのかということ真剣に議論していたことを思い出します。

第4回創大祭実行委員長としての6ヶ月は、私の人生において極めて大事な、また貴重な経験となっています。5月から11月まで、真剣に準備に当たりました。しかし、どうしても資金が足りません。皆で相談し、ポスターとワッペンを作成し販売しました。ポスターは2種類、1枚は夕日を背景にカモメが飛んでいるもので、これは当時ベストセラーになった『カモメのジョナサン』をイメージしました。もう1枚は大型帆船が大洋を航海しているものでした。その2種類は創大祭とは何にも関係がありませんが、「部屋に張ってすがすがしく感じが良いもの」というただそれだけで決めたのでした。

ちょうどその夏、大学で行われていた創価学会の夏季講習会の席上、私は壇上でポスターとワッペンの販売アピールをさせていただきました。池田先生もスピーチの際に、「大学祭で資金が足りないそうなんです。学生を応援してあげてください」と話していただき、おかげで大量に販売することが出来ました。資金はこのポスターとワッペンの販売によって、例年になく豊富となりました。すべて先生のおかげです。

実行委員長として1日1日の課題を明確にし、どうするか考え抜いて、皆で相談して、結論を出し、決着をつける。こんな毎日が続きました。

またある時、大学側と学生実行委員会との折衝がありました。その場において、学生をないがしろにする職員の発言に、私の怒りが爆発しそうになったとき、横にいて私の腕をつかんで、「我慢」とサインをおくってくれたのが副実行委員長だった、現在法学部の松田健児先生でした。本当に懐かしい思い出です。その私が大学事務局の総務部長のときに、創大祭の学生実行委員会との折衝にあたりました。本当に不思議なめぐり合わせです。

以上、雑多の話しになってしまひまして恐縮です。最後に結論として2点お話ししたいと思います。

まず第1は、平凡で取り柄のない私のような者でも、創価大学における池田先生との出会いによって、人生を意味あるものに変えることができた、ということです。本当に心が定まると力が出ます。忍耐力も出てきます。思いがけない力が出てくるのです。大切なのは「心」を定めることだと思います。この「強く定まった心」を持てるかどうか、ここが人生の分岐点になるということを痛感しています。

第2は、「あの人は恵まれている」などと言いますが、恵まれるとは何かということです。私はその人の周りの人間環境だと思っています。人間環境に恵まれるかどうか。私は本当に恵まれたと思っています。これは私の実感です。様々な面で力のある素晴らしい、頼りにな

る先輩、心から信頼できる同輩、そしてまことに見事といえる尊敬できる後輩諸氏に恵まれました。そしてなんと言っても、恵まれた人間環境の根本となるものは偉大な師匠と出会えたことです。この人間環境をもてるかどうか、人生にとって重要なのではないのでしょうか。

何かの参考になれば幸いです。以上で終了します。ありがとうございました（大拍手）。

**司会** 大変貴重なお話、ありがとうございました。それでは少し時間が余っておりますので、何でも結構ですので質問等ございましたらお願いします。

**学生** 貴重なお話、ありがとうございました。質問は2つあります。1つ目は、当時の大学紛争があったなかで、新設された創価大学のもと、学生はどのような学生生活を送っていたのでしょうか。2つ目は、お二人の考える大学建設について伺いたいと思います。

**奥山** 当時の大学紛争のキャンパスというのは、各学校によって異なりますが、授業が行えない状況でした。ですから、そういう状況のなか私は創価大学に来ました。「まともな学生生活を送りたい。勉強したい」という気持ちが多少ありました。しかし創価大学に来てみると、1期生は全員寮に入ったのです。寮に入るとどうなるかということ、一部屋12人で北は北海道、南は沖縄まで、いろんな人が来ていました。もう、動物園みたいでそれだけでもおもしろいわけですよ（笑）。夜中まで話をしていますから、朝は必然的に起きられず、授業に行けないという状況が続きました。出ようという気持ちはあっても授業には出ないという人が多かったと思います。

当時の大学紛争はとげとげしく、人間を恨むというような雰囲気でありましたが、創価大学は家庭にいるような温かい雰囲気でした。授業に出るとかとはまた違った友情や、モットーといったものを学べました。

それから「大学建設」についてですが、私が考えるにはそれほど難しいことではなくて、自分が大学に来て例えば単位を取るとか資格を取るとかは別に、「創価大学にどうすれば貢献できるのか」、また、卒業してからが本当の大学建設だと思います。

**長谷川** 「大学建設」については、さきほど私が学生時代に分からなかったとお話ししましたが、その私が大学職員になり大学建設をしているわけです。本当に不思議ですね。私は学生時代、そして職員として、創価大学のキャンパスがどのように変わっていくのを見てきました。学生課の課長をしたときがありますが、そのときに嬉しかったことは、情熱溢れる学生さんを見たときです。それは、滝山寮やいろんなクラブ団体に行ったときに感じました。「私はこうしたいんだ!」と望み、努力しても、実現しないときもあると思います。でも、私はその叫んでいる姿を見て、「この学生の将来は素晴らしいだろうな」と感じました。学生時代にいろんな課題があると思いますが、情熱溢れる学生時代を送っていくことが結果として「大学建設」へと結びつくと思います。

**学生** 私は4年生で卒業まで半年となりました。お二人の経験から、この時期に何が出来るとかというアドバイスをしていただければと思います。

奥山 アドバイスできるような学生生活を送っていませんからね(笑)。私は1、2年に一回ほど見る夢があるんです。私は英文学科だったのですが、英語で卒論を提出しなければならなかった。それが本当に大変で、ぎりぎり間に合ったほどでした。ただ論文が間に合わず、落第した夢をよく見るんです。私は創価学会本部に内定しておりましたので、実は一緒に入ったメンバーで、単位が足りずに一週間に一回大学へ単位を取りに行っていた方がいます(爆笑)。ですから、きちっと単位を取って卒業されることですね。また何か心がけなければならないことは特にはないと思います。ただ振り返ってみると、「学生時代ほど本当に素晴らしかったときはなかった」と社会に出てから思います。ですから思う存分、やりたいことをすることが大事なのではないでしょうか。後悔のない時間をお過ごし下さい。

長谷川 まったく同感です(笑)。

学生 通信教育部のものです。質問は2つあります。1つ目は、先生との思いがけない出会いはあったのでしょうか。2つ目は、同期の仲間の間で起こった悲しい出来事をどのように克服していったのかというお話をお聞きしたいと思います。

奥山 第1回創大祭が終わったあと、私は先生から一つの箴言をいただきました。それは「大事をなすは肝にあり ゆえに君よ 創立の英雄たれ」という言葉でした。それ以来、私はその箴言を座右の銘にしております。命をかけて物事に挑戦するということを教わりました。また、それは創価大学草創期の歴史を切り開いていく意味だったと思います。学生の頃は何度も激励を受け、職員になってから厳しい指導を受け、訓練していただいております。鍛えてくださる師匠がおられることほどありがたいことはないと思います。

草創期の学生が事故で亡くなられたという訃報ほど、悲しかったことはございません。日航ジャンボジェット機の墜落事故があり、それには1期生が乗っておりました。本当に悲しいことでした。また病気で亡くなられた1期生もいます。その度に、「お前の分まで頑張るからな!」という思いになりました。50歳を越えますと、健康には十分気をつけなければと思いますが、お互いに長寿で、社会貢献、大学貢献をしたいと思います。それが草創期の学生の共通した願いであると思います。

学生 私は創大祭実行委員会の記念フェスティバル部門で活動しています。第1回創大祭の記念フェスティバルはどのような経緯でつくられたものなのでしょう。また、実行委員会のメンバーへ何かメッセージをいただければと思います。

奥山 改まって聞かれますと、「どういった経緯だったかな」と(笑)。何しろ寝不足と混乱のなかでやっておりましたので(笑)。先生が全ての展示を見て回られるのだろうか、ということがありました。そうすると、お会いできる学生とそうでない学生が出てしまいますね。ともかく、一人でも多くの学生に先生とお会いしてほしい。そういう機会を設けるには、やはり全体で何かをやらないといけないと考えました。ただ学生数が700人ぐらいしかいなかったのも、本当に準備が大変でした。それでも準備して、先生に来ていただきました。特別な何かをしようという意識はございませんでした。

実行委員会の方へメッセージをとということですが、創大祭には伝統はございますが、一

回一回が一つの戦いであると思います。ですから、伝統は伝統として、皆さんは皆さん方の創大祭を開催していただければいいのではないのでしょうか。創立者との絆をつくる創大祭ですので、過去の伝統にこだわることなく自分らしい創大祭を築き上げて下さい。大成功をお祈りしています。

**長谷川** 私は創大祭を毎年見ております。草創の頃の創大祭と比べると、今のほうが間違いなく素晴らしいです（笑）。自信を持っていいと思います。また他大学の学祭と比較しても、素晴らしいですよ。

**司会** ありがとうございました。本日のシンポジウムをこれで閉会致します（大拍手）。